

明治前期の情報通信をめぐる「近代都市 京都」の形成  
—三条通の新聞社と洋館建築より— (2015)  
“A Modern City Kyoto” of Transmission of News in the Meiji Period  
: from Sanjo Street and Modern Architecture (2015)

◎樋口 摩彌<sup>1</sup>  
Maya HIGUCHI

<sup>1</sup>同志社大学大学院 社会学研究科 メディア学専攻博士後期課程 Doshisha University, Graduate School of Social Studies

**要旨**…明治前期、京都では三条通を拠点に通信事業が整備された。それを取り巻くように、新聞社が誕生し、やがて三条通は市内のメインストリートとして発展を遂げる。そこに築造された社屋の多くは、文明開化を象徴する洋館であった。それら洋館の多くが現存する三条通は、「京都の近代化」を彷彿させる通りとして、現在に息づいている。

**キーワード** 明治, 京都, 新聞社, 通信, 洋館

## 1. はじめに

近年、京都に現存する洋館が、注目を集めている<sup>1</sup>。とりわけ京都の中心部を東西に走る三条通は、市内の中でも洋館が多い通りとして知られている（図1参照）。

ではなぜ三条通には、洋館が集中しているのか。本研究は、かつて同じく三条通に集中した新聞社と、新聞社にニュースを提供してきた通信事業に注目する。

さらに本研究ではこれまでメディア研究においてほとんど取り上げられてこなかった、地理的な問題も重視する。三条通を取り巻くように所在した新聞社・洋館の位置関係を、地図にて示した（図2参照）。そこから三条通の街並みと新聞社の関係を考察し、「近代都市 京都」の形成の一端を論じる。

## 2. 「近代都市」における洋館建築

### (1)文明開化の象徴—銀座煉瓦街より—

洋館に関する研究としては、田村（1965）や小木（1979）、藤森（1982）や松山（2014）などがある。ここでは「銀座煉瓦街は、わが国における都市近代化の先駆」とされ、「文明開化の象徴」として位置付けられた（小木 1979：pp.281）。さらに新聞社屋を素材に詳細な検証を行った小木は、洋館が文明開化の象徴として認識される一要因に、案内書や新聞報道があると指摘している（小木 1979：pp.281）。

### (2)京都三条通の洋館への注目

京都に目をうつすと、『京都新聞 [明治4年創刊]』や『京都新報 [明治5年創刊]』では、明治6年に建設された木造洋風建築である集書院を、絵入の記事で報じている<sup>2</sup>。また京都の三条通に洋館が数多く建設されていたことは石田（1984：pp.130-139）をはじめ、谷（1977）や前掲（注1）の書籍によって語られている。そこに新聞社が集中したことも、先行研究によって指摘されている<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> 書籍では中川・三田村（2002）や井上（2011）など多数。他、市内の資料館での企画展（「京都市考古資料館と建築家 本野精吾 一竣工100年を記念して—」（於：京都市考古資料館）などが開催される。

<sup>2</sup> 『京都新聞 [明治4年創刊]』（明治6年5月付）や『京都新報 [明治5年創刊]』（明治6年5月19日付）。

<sup>3</sup> 明治前期の新聞社の所在地については樋口（2015a）、同（2015b）、大正期については谷（1977）の研究があるが、いずれも指摘のみで留まっている。なお京都の新聞史に関する主な先行研究としては、宮武（1965）や大庭（1979）がある。しかし樋口（2014）にて明治初期に発行された京都の新聞紙に関する綿密な基礎調査を試みたところ、先行研究の約2倍もの種類の新聞発行を確認した。それを樋口（2015b）で通史的にまと

図1 「京都郵便局（現 中京郵便局）」（典拠：（森 2012:pp.135））



注記：三条東洞院から北方向を写したもの

### 3. 東海道にみる情報通信—東京・大阪間<sup>4</sup>のハブとしての三条通—

#### (1) 三条通とは—東海道の西端—

三条通は、京都市内全域を東西に横断する通りである。その東端は京都市山科区の四ノ宮、西端は嵐山の渡月橋にまで通じており、京都随一の長さを誇る。戦火にも免れ、今日、市内中心部には戦前の建造物が多く残っている。

三条通の歴史は、平安京の成立時に遡る。道幅は変更されたものの、その経路はほぼ同じである<sup>5</sup>。特に重要なのは、市中を流れる鴨川にかかる三条大橋である。ここは東京—京都間をつなぐ東海道の始（終）点であった。つまり三条大橋に通じる三条通は、東京—日本橋・銀座—へと通じる街道の西の最先端ともいえる。東海道は、ニュースを含め、あらゆる人やモノが行き来する大動脈であった。明治前期の新聞社は、東海道の東西の両端に位置したことになる。

#### (2) 三条東洞院〔烏丸〕—東京・大阪との接続点—

東海道は、人のみならず、馬の往来も多い。馬の運輸業者である馬借は、三条大橋から約1.2km西の、三条東洞院および烏丸周辺に多く所在した<sup>6</sup>。それゆえ彼らにとっての東海道の終着点は実質、三条東洞院であった。

東洞院通は、京都市内を南北に縦断する通りである。この通りは、京都の東西の都市を結ぶ街道を考えるうえで、存外に重要である。東洞院通を南下すると、やがて竹田街道〔大和街道〕に引き継がれる<sup>7</sup>。竹田街道は京都の伏見に通じており、伏見を流れる淀川は、大阪湾への運河として機能している。すなわち三条東洞院は、街道や運河を介する、東京・大阪との接続点であったと位置づけられる。とりわけ享保年間（1716-1736）には交通量も非常に多く、その対策として東洞院通は北行き一方通行に定められたほどである。これは日本で最も早い、一方通行の規制といわれる（日本アート・センター編 2003：pp.39）。なお明治期になると馬借は馬車会社へと移り変わるが、その役割は踏襲され、馬車会社が多く設置される<sup>8</sup>。その後鉄道が整備され、一般的な交通手段と成り得るまでは、主要な運輸機関として機能した。

すなわち三条東洞院は、東方には東海道および東京、南方には竹田街道および大阪があり、東京・大阪間のハブ的空間として機能していたといえる。こうして交通の要所であった三条通は、やがて情報伝達の一大拠点となり、当時の情報産業の花形であった新聞社が、ここに集中することとなる。

め、その所在地を詳細に検討したものが樋口（2015a）である。

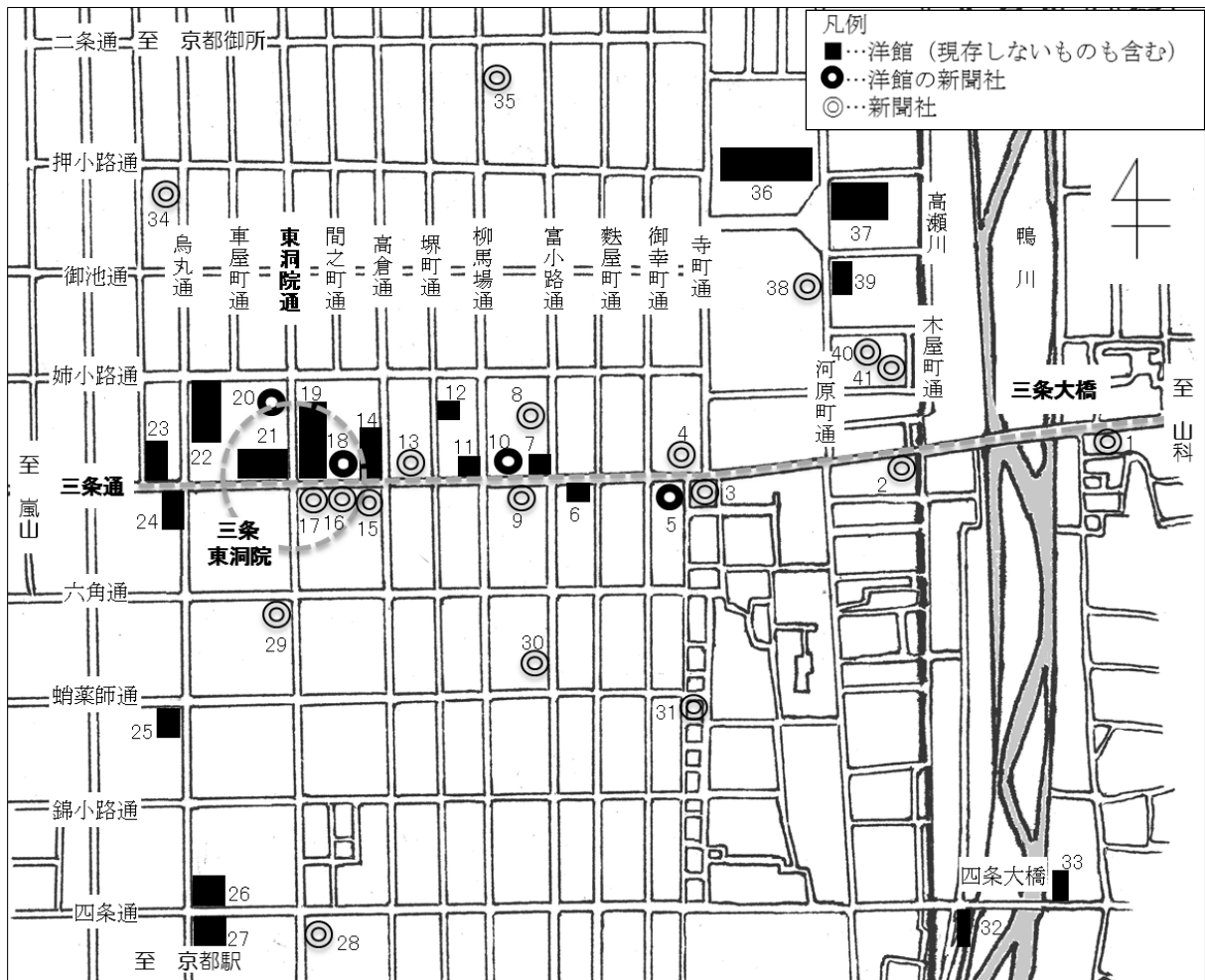
<sup>4</sup> 近世期を語るにおいて、東京および大阪は、江戸・大坂と表記するのが正確である。しかし本稿では便宜上、東京・大阪と統一して表記する。

<sup>5</sup> 平安時代は三条大路と呼ばれた。以後、豊臣秀吉に代表される道路整備が行われたが、大方その経路には変化はない。（京都市編 1909：pp.249、京都市編 1970：pp.299-301）。

<sup>6</sup> 烏丸通は京都中心部を南北に走る大通りで、現在の京都駅に直結する。その一筋東の通りが—その間は約100m—、東洞院であった。なお現在の烏丸通は明治・大正期に拓幅されたもので、それ以前は東洞院と同様、細い道であった。「三条通烏丸東入」と、「三条通東洞院西入」は同じ場所を指すが、本稿では当該の時代感覚を重視し「東洞院」での表記を採用する（松本 1900（第5巻）：pp.522）。

<sup>7</sup> 伏見の京橋からは、淀川を運河として大阪湾に繋がっている。

図2 京都の洋館—三条通に新聞社を中心に—（地図の典拠：大日本帝国陸地測量部 明治21年）



- |   |  |  |
|---|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 京都日報社</li> <li>2. 京都新聞社（現在の京都新聞社とは異なる）</li> <li>3. 朝日新聞社京都支局</li> <li>4. 西京新聞社</li> <li>5. 毎日新聞京都支社*</li> <li>6. 家刃時計店*</li> <li>7. 不動貯蓄銀行京都支店*</li> <li>8. 京華日報社</li> <li>9. 大阪新報京都支局</li> <li>10. 大阪朝日新聞京都支局</li> <li>11. 日本生命京都支店*</li> <li>12. 万年社京都支社</li> <li>13. 日出新聞社</li> <li>14. 日本銀行京都支店*</li> <li>15. 常盤新聞社・朝日新聞西京分局</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>16. 万年社京都支社</li> <li>17. 京華社</li> <li>18. 中外電報社（前 京都新報社・京都滋賀新報社）</li> <li>19. 京都郵便局*</li> <li>20. 御用書林村上勤兵衛*</li> <li>21. 京都電信局</li> <li>22. 京都中央電話会社*</li> <li>23. 西村貿易店*</li> <li>24. 第一銀行京都支店*</li> <li>25. 山口銀行京都支店*</li> <li>26. 三井銀行京都支店*</li> <li>27. 三菱銀行京都支店*</li> <li>28. 京都絵入新聞社</li> <li>29. 京都物産引立総会社（『京都新聞（明治3年創刊）』発行）</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>30. 勉強広告新聞社・東京日日新聞通信員</li> <li>31. 朝日新聞西京支局</li> <li>32. 東華菜館*</li> <li>33. 菊水*</li> <li>34. 京都新聞社（現在の京都新聞社とは異なる）</li> <li>35. 日出新聞社</li> <li>36. 京都市役所*</li> <li>37. 京都ホテル</li> <li>38. 今井大国屋太郎右衛門（『京都寮病院新聞』発行）</li> <li>39. 聖ザビエル天主堂</li> <li>40. 西京錦絵新聞社</li> <li>41. 煥文堂・平安新聞社（『西京煥文新誌』発行）</li> </ul> |
|---|--|--|

注1：社屋は幾度かの移転がみられるが、本研究では所在地に重点置いたために、それらは特に表記していない。

<sup>8</sup> 『西京新聞』（明治13年7月11日付）には、広告「運送馬車／西京姉小路東洞院角／運送馬車取扱所／安田峰三郎」が記されている。

注2：社名は原則増設当初のものを採用した。よってそれらの大部分は旧名である。現存するものは名称を記した。

注3：建築当初の社屋が何らかの形で現存するものについては、社名の後ろに「\*」を記した。

#### 4. 三条通の洋館を拠点とした通信事業と新聞社

##### (1) 通信事業の発展

近世期、ニュースは主に東海道を走る飛脚によって伝達されていた。しかしその伝達システムは、飛脚制度の廃止によって明治改元後に大きく転換する。その第1は新式の郵便制度の整備、第2は電信や電話など新たな通信機関の出現である。

まず郵便制度について述べると、慶応4年（1868）閏4月、京都におかれた新政府は郵便司を設置した。しかし同年10月、東京奠都とともにその一部が東京に移転し、明治2年（1869）5月に廃止された。しかし明治3年2月に郵便司の京都出張所が設置され、郵便事業創業への準備が始まった。そして明治3年（1870）11月27日、姉小路通東洞院南西角の旧金座跡<sup>10</sup>、郵便司郵便役所<sup>11</sup>が置かれた（郵政省編 1971：pp. 557-558）。明治4年（1871）3月から開始される東京・京都・大阪間の「新式郵便」に備えた。そして明治8（1875）年、京都郵便局と改称された。明治12年（1879）、京都郵便局は三条東洞院北東角に移転した（図2の19。以下同様に図2の番号を示す）。社屋は洋風木造二階建であった。

しかし、明治32年（1899）に焼失し、明治35年（1902）、煉瓦造の社屋が竣工された（図1 右側の社屋）。その後社屋の内部は改修されたが外観は現在もその姿を留め、三条通の代表的な洋館となっている（村松 1978：pp. 178、本松 1979：pp. 73-74）。

次に電信施設についてまとめる。明治5年（1872）4月、河原町三条一筋上ル東側に西京電信局が設置された。そして明治5年5月に、京阪間、9月に東京一京都間が試業開通され、ニュースが電信で伝達され始めた。明治7年（1874）2月には、西京電信局は京都郵便役所の西向かいである三条東洞院北西角に移転された（21）。やがて明治20年（1887）、京都郵便局と京都電信局が合併され、京都郵便電信局となった。

この電信敷設は、近代化に邁進する京都府にとって急務であった。それは新政府の事業に先んじて京都府が明治4年（1871）2月、独自に京阪間で電信架設を計画したことから窺い知ることができる（京都市 1979〔第7巻〕：pp. 272）。また文明開化にあたって教化を試みる講師が「方今文明にして、知識<sup>ちひ</sup>日に開く。電機<sup>でんき</sup>以て五方の信を瞬間に通ずべく、天狗<sup>てんこう</sup>を情<sup>じやう</sup>ひて急脚<sup>きやく</sup>を<sup>わづら</sup>累<sup>もち</sup>はすを須<sup>もち</sup>ひず（菊池 1874：7丁裏）」<sup>12</sup>と語るように<sup>13</sup>、電信という新通信技術は、旧来の飛脚に代わる文明開化の象徴だった。

最後に電話について述べる。明治20年（1887）、京都では疏水工事に電話の敷設が行なわれた。ただし一般に普及され始めるのは明治29年である。三条通東洞院西入に京都電話交換局が設置され、電話加入の申し込みを受付を開始した（京都市 1979〔第7巻〕：pp. 272）。そして大正15年（1926）、同区画に京都中央電話局の社屋として鉄筋コンクリート造3階の洋館が建築された（22）。現在も複合商業施設をして姿を留めている。

##### (2) 新聞社の創業

こうして伝達された最新のニュースを基に操業されるのが、新聞発行事業である。明治前期に三条通およびその近隣に新聞社が次々と開設された。慶応4年（1868）、新政府の御用書林として、『太政官日誌』の印刷を村上勤兵衛が担う（20）。村上は近世初期に創業した書肆で、明治維新期においては京都書籍界を率いる存在であった。社屋は三条通姉小路下ルで郵便司の京都出張所に隣接し、まさしく東西の情報の終着点であった。その後、同年には『都鄙新聞』を創刊、明治4・5年（1871・1872）には『京都新聞（明治4年創刊）』『京都新報（明治5年創刊）』を創刊し、明治初期における京都の新聞発行を牽引していった。

明治10年（1877）には『京都日日新報』を発行する京都日報社が（1）、その付近には、『京都寮病院新聞』を発行した今井大黒屋太郎右衛門（38）、『西京絵入新聞』を創刊した西京絵入新聞社（40）、『西京煥文新誌』や『平安新聞（明治10年）』を創刊した煥文堂（41）、『京都新聞（明治18年創刊）』を発行する京都新聞社などが相次いで社屋を構える（2）。

また明治12年（1879）、大阪で創刊された朝日新聞社が、京都進出を図った。まず寺町蛸薬師角で新聞・雑誌売捌業を務める

<sup>9</sup> 当該の変容については、藪内・田原（2010）の一次史料に依拠した実証的な研究がある。

<sup>10</sup> 姉小路通は、三条通の一筋—100m—北の通りである。

<sup>11</sup> 京都郵便役所または西京郵便役所と呼称されることもある。

<sup>12</sup> 原文の右側注を平仮名で、左側注をカタカナで表記する。

<sup>13</sup> 書き下しは、小林勇校註（2004）に依った。

太田権七を朝日新聞社分局とした《31》。翌年、三条高倉を拠点に、姉妹新聞となる『常盤新聞』を発行した《15》。その後、三条寺町西入に朝日新聞社京都支局が開設した《3》。

とりわけ重要なのが、現在発行される『京都新聞』の源流である『京都新報（明治14年創刊）』の創刊である。発行元の京都新報社の社屋は、三条通東洞院東入にある京都郵便局の東隣に設置された《18》。その社屋は、明治5年に竣工された洋風木造二階建の旧集書院の社屋を利用した（京都新聞社史編さん小委員会編 1979：pp.108）。

さらに明治後期以後に目を移すと、大阪から進出した新聞社や広告代理店が、三条通を取り巻くように進出した<sup>14</sup>。新聞社としては、京華日報社《8》・大阪新報京都支局《9》・大阪朝日新聞京都支局《10》、新聞の広告代理店としては萬年社《12,16》・京華社《17》であった。

その中で現存しているのが、昭和3年（1928）竣工の洋風建築である、毎日新聞社京都支局である《5》。社屋の設計は武田五一で、鉄筋コンクリート造3階建である。そのアール・デコ風のビルには、現在ギャラリーやレストランが入っている。

### ③相乗的な発展へ—銀行への波及—

近世期、金座が置かれて金融の拠点として機能した三条通には、新たな金融システムである銀行が設置され始める《7. 不動貯蓄銀行京都支店・24. 第一銀行京都支店》。とりわけ現在の三条通にある洋館建築の代表格が、日本銀行京都支店である。明治27年（1894）、東洞院通御池下ルに日本銀行の出張所が開設された。明治39年（1906）、それは三条通高倉西入に移転し、煉瓦造2階建の社屋が竣工された《14》。手がけたのは辰野金吾で、京都府京都文化博物館として現存する。

こうして明治初期、京都では近世以来の交通・通信事情を踏襲し、三条東洞院を中心に京都の通信施設が発達・整備されていった。かつそれら社屋は洋館で、この界限に文明開化・欧化を彷彿させる空間を形成することとなる。

### 5. その後の三条通—洋館建築の波及—

大正・昭和期の三条通には、貿易会社や保険会社が設立された《11. 日本生命京都支店・23. 西村貿易店》。さらに道路の拡張や鉄道の発展に伴い、銀行が烏丸通や四条通に建設された《25. 山口銀行京都支店・26. 三井銀行京都支店・27. 三菱銀行京都支店》。こうして洋館建築は、三条通から南へと広がっていく。

そして現在、それらの洋館は旧来の施設または飲食店やファッションビルとして機能しているものも数多い<sup>15</sup>。こうして京都の洋館は、現在の京都の町に、明治維新・近代化を彷彿させるシンボルとして息づいている。

### 6. まとめ—洋館の遺構群から—

本研究では、三条通に遺存する洋館を手がかりに、明治・大正期の京都の都市形成の一片を考察した。三条通は東京・大阪に通じる街道の、ハブとして機能してきた。やがてその交通機関は、最新かつ大量のニュースが集まる情報の一大拠点となり、京都のメインストリートとして発展した。

そして三条通は、通信施設を端緒に、新聞社など情報通信産業が集中する。あわせて銀行や保険会社、貿易会社なども設置される。これらは文明開化を象徴する施設であるが、加えてそれらの建造物も、欧化の象徴である洋館建築であった。こうして三条通は、機能・外観ともに、近代化のシンボルとして発展していく。

そして今日三条通には、本稿で論じた近代的な洋館と、旧来の伝統的な町家造りの建造物が混在している<sup>16</sup>。こうして新旧が同居する独特の町並みは、明治期における「近代都市 京都」の姿を彷彿させる独特の空間を作り出したのである。

<sup>14</sup> 「〔国際日本文化研究所HP内〕 京都市街全図〔大正2年、京都府〕」 [http://tois.nichibun.ac.jp/chizu/santoshi\\_6.html](http://tois.nichibun.ac.jp/chizu/santoshi_6.html) (2015.5.24取得)。樋口(2015b：pp.97)。

<sup>15</sup> 本稿で取り上げた全ての現存する建造物は重要文化財・指定文化財に定められている。

<sup>16</sup> 昭和60年（1985）、三条通は京都市から「歴史的界限景観地区」に指定されている。

## 参考文献

- 1)石田潤一郎編 (1984) 『近代建築ガイドブック 関西編』 鹿島出版会
- 2)井上章一 (2011) 『京都洋館ウォッチング』 新潮社
- 3)大庭元 (1979) 「京都府新聞史」 日本新聞協会編『地方別日本新聞史』 日本新聞協会
- 4)小木新造 (1979) 「銀座煉瓦地考：開化東京の光と翳り」 林屋辰三郎編『文明開化の研究』 岩波書店
- 5)川上貢 (2007) 『京都の近代化遺産：歴史を語る産業遺産・近代建築物』 淡交社
- 6)菊池純 (1874) 『西京傳新記〔初編〕』 文石堂 北邸四郎兵衛
- 7)京都建築倶楽部編 (1898) 『モダンシティー-KYOTO：建築文化のカタログ都市』 淡交社
- 8)京都市編 (1979-1980) 『京都の歴史』 全10巻、京都市編さん所
- 9)京都新聞社編さん小委員会編 (1979) 『京都新聞百年史』 京都新聞社
- 10)児玉幸多校訂 (1974) 『飛脚関係史料〔近世交通史料集 第7巻〕』 吉川弘文館
- 11)——— (1979) 『幕府法令 下〔近世交通史料集 第9巻〕』 吉川弘文館
- 12)小林勇校註 (2004) 「西京傳新記〔初編〕」 日野龍夫他校註『開化風俗誌集（新日本古典文学大系；明治編；1）』 岩波書店
- 13)佐々木隆 (1999) 『メディアと権力』 中央公論新社
- 14)鈴木俊幸編 (2007) 『近世書籍研究文献目録』 ペリかん社
- 15)武知京三 (1978) 『明治前期輸送史の基礎的研究』 雄山閣出版
- 16)田中泰彦編 (1974) 『京都慕情：写真集』 京を語る会
- 17)谷直樹 (1977) 「明治初期における京都三条通境界の変遷(建築史)」 『日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系』 No. 17, pp. 473-476
- 18)田村栄太郎 (1965) 『銀座・京橋・日本』 雄山閣
- 19)逋信省 (1936) 『逋信省五十年略史』 逋信省
- 20)土山年雄編 (2004) 『電信の歴史と京都電報局の歴史を年表で見る』 土山年雄
- 21)東京建築探偵団、藤森照信編 (1982) 『近代建築ガイドブック 関東編』 鹿島出版会
- 22)鳥越一朗 (2006) 『京都大正ロマン館』 ユニプラン
- 23)——— (2013) 『レトロとロマンを訪う 京都明治・大正地図本 近代建築物年表付』 ユニプラン
- 24)中川理文、三田村勝利 (2002) 『京都モダン建築の発見』 淡交社
- 25)ナカムラユキ (2012) 『京都レトロ散歩』 PHP 研究所
- 26)日本アート・センター編 (2003) 『京都の大路小路』 小学館
- 27)樋口摩彌 (2014) 「明治前期の京都新聞史に関する基礎研究：新聞・雑誌の所蔵調査に基づいて」 『書物・出版と社会変容』 No. 17, pp. 77-101
- 28)——— (2015a) 「明治前期の京都における新聞・雑誌の印刷所の実態」 『書物・出版と社会変容』 No. 18, pp. 49-71
- 29)——— (2015b) 「明治前期の京都新聞史(上) —木版印刷から活版印刷へ—」 『メディア史研究』 No. 37, pp. 94-114
- 30)藤井信幸 (2005) 『通信と地域社会』 日本経済評論社
- 31)藤森照信 (1982) 『明治の東京計画』 岩波書店
- 32)藤原安紀子編 (2004) 『京都の洋館』 青幻舎
- 33)本多隆成 (2014) 『近世の東海道』 清文堂出版
- 34)前久夫、日向進編 (1997) 『京都の赤レンガ：近代化の遺産』 京都新聞社
- 35)松本利治 (1988-1995) 『京都市町名変遷史』 第1-5・7巻、京都市町名変遷史研究所
- 36)松山恵 (2014) 『江戸・東京の都市史：近代移行期の都市・建築・社会』 東京大学出版会
- 37)宮武外骨・西田長寿補 (1955) 「明治前期新聞創刊年表」 明治文化研究会編『明治文化全集 第4巻』 日本評論社, pp. 605-627
- 38)村松貞次郎 (1978) 「都の花にさきがけて—外壁保存なった中京郵便局」 『新建築』 53(5), pp. 178
- 39)本松智房 (1979) 「中京郵便局庁舎の外壁保存と景観の保持」 『建築雑誌』 94(1154), pp. 73-74
- 40)森安正編 (2012) 『絵ものがきで見る京都：明治・大正・昭和初期』 光村推古書院
- 41)守屋毅 (1981) 『三都』 柳京書店
- 42)歳内吉彦 (2010) 『近代日本郵便史 創設から確立へ』 明石書店
- 43)——— (2013) 『日本郵便創業の歴史』 明石書店
- 44)郵政省編 (1971) 『郵政建築史料集〔郵政百年史資料 第27巻〕』 吉川弘文館